

## 湖南フリモ 「steed」製作に関わる皆さん

発行エリアで

ここでは、若竹作業所(草津市)・びわこみみの里(守山市)について、「steed」の製作にどのように関わっているのか、どのような作業所なのかを紹介する。

### 若竹作業所

1990年に開所した、障がい福祉サービス事業所「若竹作業所」。一般企業などでの就労が困難な障がい者に働く場を提供しながら、知識および能力の向上を目指し、訓練を行っている。

城さんからの呼びかけが縁で、「steed」製作に関わるようになったという。現在、ゼッケンに付いているマジックテープを取り除くほか、洗濯に従事。担当のメンバーが作業にあたり、洗濯後のゼッケンは同作業所に通うメンバーが手分けして干している。

ボルトにワッシャーを組んだり、小袋に入れたりする下請け事業、パンや和紙づくりなど、今後も一人一人に合わせた仕事を提供していく方針である。

若竹作業所 草津市山寺町657-1 TEL.077-565-0178  
http://www.wakatake.info/wakatake/



おからを使用したパンやクッキーも製造している



上)バウムクーヘン 下)クッキー(ばうむの掬)



びわこみみの里 副所長  
田中 佑樹さん  
「びわこみみの里」では、「steed」製品のほか、手づくりのバウムクーヘンやクッキーなども販売しています。ぜひ、お気軽にお越しください」

### びわこみみの里

「びわこみみの里」は、聴覚障がい者の福祉的就労の場として、菓子製造・縫製作業・販売活動・内職作業・施設外就労・聴導犬訓練事業に取り組んでいる。

洗濯済みのゼッケンの糸をほどき、アイロン、裁断、縫製、検品の作業を終えると、「steed」のゼッケンバッグが完成する。「びわこみみの里」に通うメンバーと、大阪にあるかばんの製造会社がバッグ製作に関わっており、これまで50種類ほどを手掛けてきた。同作業所の「steed」製作メンバー全員が縫製経験者である。

「びわこみみの里」では、バッグ製作から販売・オンラインショップでの注文受付・梱包・発送までを担当しているため、自分たちの手でつくったものが実際に購入される場面にも立ち会える。「steed」製作は、向上心を育み、やりがいのある仕事の一つになっている。

びわこみみの里 守山市水保町165-1 TEL.077-514-9078  
http://www.33nosato.jp/

んと滋賀県内の作業所は模索した。そんなとき、ゼッケンの生地がベトナムに変わってきた。これを機に縫製・加工の内製化を目指す。滋賀県内の作業所に対し商品の試作を募り、守山市の聴覚障がい者施設「びわこみみの里」での縫製が決まる。現在、ゼッケンの洗濯工程は「若竹作業所」が担当している。

2009年冬、こうして障がい者によるハンドメイドバッグのブランド「steed」が立ち上がる。ブランド名の「steed」は「優駿」を意味し、足の速いすぐれた競走馬を指

クオリティーやデザインにこだわった、世界に一つだけのオリジナルバッグ

す。ロゴの制作は印刷やデザインを行っている大津市の作業所が担当した。商品のラインアップは、人気のトートバッグの他、ショルダーバッグ、リュックサック、ポディーバッグ、サコッシュなど。現在は、「びわこみみの里」とオンラインショップで販売するほか、JRA関連のイベントやデパートなどでの催事で出店している。

福祉を強く掲げるのではなく品質とデザインで勝負を

「障がい者も縫いやすいデザインに変更するなど、工夫を凝らしながら商品開発をしてきました」と、「s

ted」製作に関わるメンバーは口々に話す。

調教ゼッケンは、馬齢ごとに色分けされている。2歳9月頃までが緑地に白数字、2歳10月頃から3歳9月頃までが黒地に白数字、3歳10月頃以降が白地に黒数字、の3種。番号は2ケタから4ケタで、毎年個別の数字が割り当てられる。だから「steed」のバッグは一つとして同じものが無い、世界に一つだけのオリジナルバッグなのだ。

1年間、競走馬の調教に使われたゼッケンを、障がい者が分担して「洗う」「ほどく」「縫う」の作業を丁寧

に行い、バッグとしてよみがえらせる。そうしたストーリー性を前面に押し出して販売を始めたが、城さんと滋賀県内の作業所は今後を見据えて、チャリティーになってしまつてはいけないと話す。あくまでも、商品としてのクオリティーやデザインで購入してもらおう。

「使用済みのトラックの幌やシートベルトを再利用した、スイスのバッグメーカー「FREITAG」は世界的な人気ブランドです。製造工程には障がい者が関わっています。「steed」も、そんな一流ブランドを目指したいですね」と意欲をみせる。

競走馬の使用済み調教ゼッケンをリメイクしてバッグに。

障がい者の就労支援に取り組み、特定非営利活動法人滋賀県社会就労事業振興センターの理事長、城貴志さんと滋賀県内の作業所のアイデアから「steed」は生まれた。

2006年、障がい者支援を求め、栗東トレーニングセンターを訪れた城さん。幸いにも理解を得られて、印刷物を手掛ける作業所(障がい者のための福祉通所施設)への名刺や封筒類の発注がかなう。その後、納品などでたびたび足を運んでいる際に、調教時に使われていたゼッケンが破棄されることを知る。

流出や売買を防ぐための破棄処分、年間およそ6500枚を数えた。再利用できないか。当時の調教ゼッケン生地は京都の帆布メーカー製

### 巻頭特集 競走馬のゼッケンを再利用したバッグ「steed」

# 色と番号を生かしたオリジナルティーが人気!

2千頭を超える競走馬が調教されている、日本中央競馬会(JRA)の栗東トレーニングセンター。調教中の馬は識別のためのゼッケンを装着しており、毎年10月に交換される。その使い終わったゼッケンが、障がい者のおしゃれなバッグに生まれ変わった。



生地はリサイクルペットボトル再利用布のため、耐久性が高い。栗東市のふるさと納税の返礼品としても人気。近年は美浦(みほ)トレーニングセンター(茨城県)との交流もあり、同センターの調教ゼッケン(緑地や黒地にオレンジの数字・黄色地に黒数字)が加わって、バッグデザインのバリエーションが増えている【「steed」公式ウェブサイト https://steed.jp/】

だったことから、バッグの製造を思い立つ。

「作業所で商品化すれば、障がい者の働く機会と収益につながります。JRAにとってはCSR(企業が果たすべき社会的責任)活動として企業価値の向上が見込めます。廃棄物の再利用という点では環境にも優しい。福祉よし、企業よし、地域よし、と、いわゆる近江商人の「三方よし」です」と城さんは思いをぶつけた。

協議の末、障がい者の役に立つのなら、と無償で提供されることになったのだ。

バッグの縫製には設備と高い技術が必要となる。当初は譲り受けたゼッケンの洗浄、バッグの梱包と発送を作業所が受け持ち、縫製は企業に外注していた。より障がい者の所得として還元するために、なんとか全工程を作業所で行えないかと、城

滋賀県内の作業所で扱う

「特に、競馬ファンや若い女性に人気で、「steed」のバッグを持つ方を街中で見かけることもあり、思わずうれしくて頬が緩んでしまいます」



特定非営利活動法人 滋賀県社会就労事業振興センター 理事長  
城 貴志さん